



著作権上の問題があるため、ホームページ掲載分の「高原列車は行く」の歌詞は削除しました。
ご了承ください。



昭和43年4月28日、沼尻 新井清彦氏撮影

あの名曲のモデルが沼尻軽便鉄道

町は平成14年、「高原列車は行く」の歌碑を中ノ沢温泉入口に建立。歌碑竣工除幕式には丘さんも出席。「沼尻軌道は、体の弱かったわたしを育ててくれた温泉の思い出とともに心に残っている。たとえ廃線になっても、この歌が続く限り、沼尻軌道はいつまでも走り続けてくれる」と語った。

丘さんは昨年11月、多くのファンに惜しまれながら他界したが、沼尻軽便鉄道はわたしたちの心の中で、今なお走り続けている。

中ノ沢温泉入口に建てられた歌碑。丘さんの思い出とともにたずむ



マッチ箱に乗って

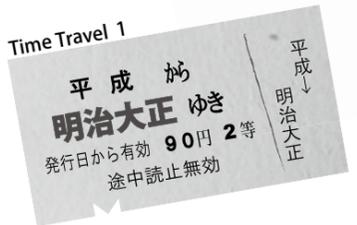
Special Feature  大正発未来行きの時間旅行

皆さんは覚えているだろうか？ 大正から昭和にかけて、町の産業・経済の発展と人々の生活を支えた沼尻軽便鉄道を惜しまれながら廃線となった「軽便」には、いつも笑顔があふれていた、夢やロマンが詰まっていた軽便が現代に語りかけるもの——

それは満たされた時間の過ごし方、幸せな地域のつくり方なのかもしれない。さあ、価値観のリセットに出掛けよう

今、心の中を始発駅に、軽便という名のタイムマシンが走り出す

【沼尻軽便鉄道】
1913（大正2）年から1969（昭和44）年までの57年間、沼尻—川桁駅間の約16kmを運行。その形状から「マッチ箱」や「豆汽車」の愛称で親しまれた。軽便は、在来線より軌道の幅が狭い列車のこと。別名沼尻軌道、耶麻軌道とも呼ばれていた



時代を支えた軽便

軽便鉄道は、沼尻鉱山から掘り出した硫黄を輸送するために敷設された。国の近代工業化と町の経済発展を支えた軽便鉄道。それは、沼尻鉱山の隆盛の歴史であると同時に、そこに暮らす人々の繁栄の証しでもあった。

硫黄輸送がきっかけ

沼尻軽便鉄道は、沼尻硫黄鉱山で採れた硫黄を輸送するため、日本硫黄株式会社が大正2年（1913年）に敷設した鉱山軌道だ。

当時の日本は世界的な硫黄輸出。高純度の日本産硫黄は希少な鉱物資源で、近代工業が軌道に乗り始めた日本にとって貴重な外貨獲得手段の一つでもあった。

鉱山の開業当時は、掘り出した硫黄を荷馬車などで搬送していたが、採掘量の増加や荷痛み（時間経過に伴う硫黄の品質低下）の防止などために、別な搬送手段が必要になった。そこで持ちあがったのが鉄道による硫黄輸送計画である。

日本硫黄本社は、社内に「耶

麻軌道部」を設置して軌道建設を実施。大正2年（1913年）、

沼尻から川桁に至る11駅、15.6キロの路線を開通した。開通当時の動力は馬だったが、翌年、ドイツ・コッペル社製の蒸気機関車を導入し、輸送量を飛躍的に増加させた。こうして軽便によって川桁まで運ばれた硫黄は、磐越西線経由で全国の港などに輸送され、海外に輸出された。

昭和の最盛期には、化学繊維、パルプ、肥料、ゴム製品やセロハンなどの原料として需要が拡大。ピークとなった昭和11年には、1万7184トンの硫黄が生産された。

物心共に豊かな鉱山

沼尻鉱山は、採掘場（通称：元山）と製錬所（通称：製錬）



硫黄や物資を運ぶため、沼尻駅と鉱山に結ばれた鉄索。この時代、鉱山内には多くの鉄索が張り巡らされていた

の2地区に分かれていた。それぞれに長屋や病院などがある大きな集落を形成し、最盛期には、鉱山労働者とその家族などおよそ2千人が暮らしていた。

電気は自社の発電所を設置して供給した。水は山からの湧水などを使用した。電気代も水道代もかからないことから、ここでの暮らしは「つけっぱなし、出しっぱなし」が当たり前だったという。

食料や生活用品などは、「用度」と呼ばれる鉱山の消費組合が一括して調達し、鉱山で生活する人々の暮らしを支えた。配給される食料以外は、それぞれの購入分が給料から天引きされる仕組みになっていた。

姫沼発電所の貯水池「姫沼」は職員の保養施設でもあった。噴水を備えた沼の周りには、もみじなどの樹木が美しく植樹され、運動場、滑り台、ブランコやシーソーなども整備されていた。年に一度、労働者や家族が参加して盛大に開かれる運動会は、ここに暮らすすべての人の楽しみだったという。

冬こそ厳しい寒さと雪に悩まされたが、沼尻での暮らしは、現代にはない豊かさに満ちあふれていた。そこには、確かな人と人とのつながりや、地域の連帯感があった。



1 現在の元山小中学校跡地。校舎の姿はなく、雑草が生い茂っている 2 小学校跡地で、唯一当時の面影を残していた鉄棒 3 昭和30年ごろの元山小中学校の全景。土を盛り上げて作られた校庭や鉄索が、鉱山内に作られたことを物語っている 4 硫黄を運ぶ軽便。貨車の後ろには客車が見える



Interview

元山小中学校の元教諭
長尾景是さん

Nagao Kagetsuna
上新町

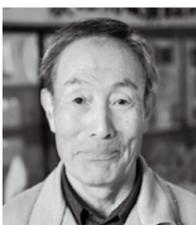
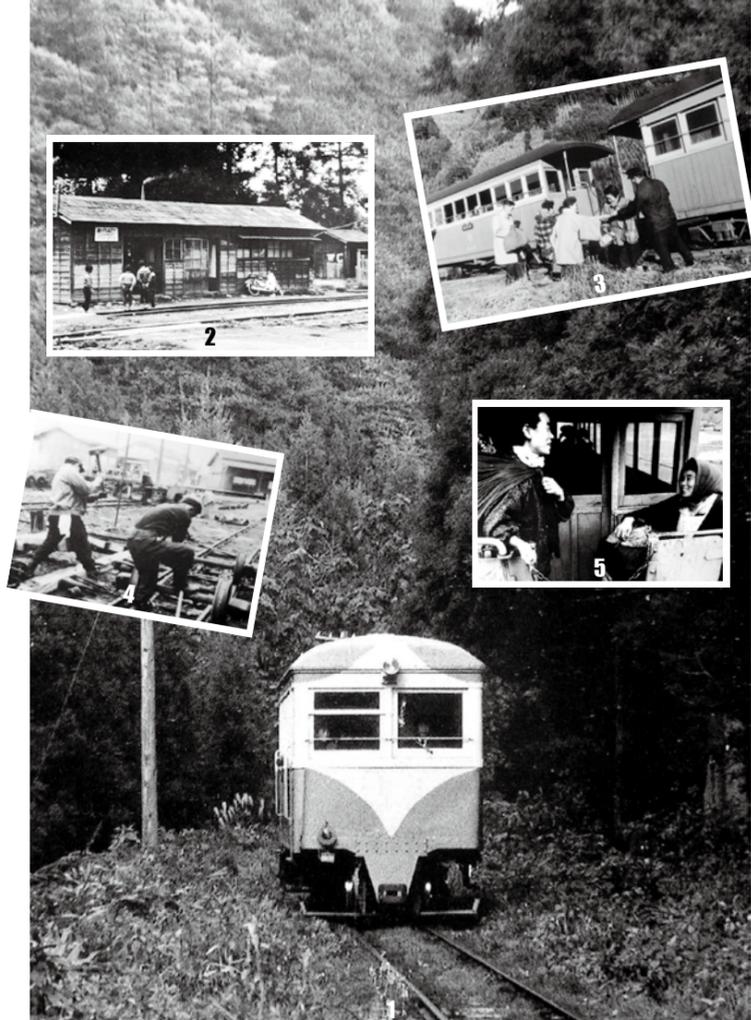
鉱山全体が家族のようだった

わたしは昭和42年4月に教員になりました。その初任地が元山小中学校でした。「合宿」と呼ばれた鉱山宿舎に、鉱山関係者と学校の教員と一緒に下宿していました。宿舎の風呂は、温泉の源泉を引いたものと真水の二つがありました。山奥でしたが環境は最高でしたね。学校は生徒数が少なくて複式学級。わたしが中学1年生、もう一人の先生が2、3年生を受け持ちました。生徒たちはとてもどかどかで、男子も女子も制服のままソフトボールや自転車の練習をしていました。食料や生活用品などは用度から購入していたので、生徒たちと弁当のおかずと一緒にすることもしばしば。そんなこともあって、鉱山全体が一つの家族という感じでした。

沼尻軽便鉄道の略年表

- 明治21年（1888年） 沼尻山（現在の安達太良山）の沼ノ平噴火口で硫黄製錬が始まる
- 33年（1900年） 沼尻山が噴火し、作業場や住宅などが倒壊、埋没。死傷者は80人を数え、硫黄製錬事業が頓挫した
- 37年（1904年） 新資本が沼尻山硫黄鉱区を譲り受け、事業再開
- 39年（1906年） 岩代硫黄株式会社を設立。翌年、同社を継承した新会社、日本硫黄株式会社を設立。
- 41年（1908年） 新たな硫黄輸送手段の整備に向けて、耶麻軌道株式会社を設立
- 43年（1910年） 線路と動力の変更願いを内務大臣へ提出。輸送をより早く、効率的にするため、人力トロッコから馬車へ変更する
- 45年（1912年） 川桁〜沼尻間の全線工事に着手
- 大正2年（1913年） 川桁〜沼尻間が開通し、耶麻軌道の運行を開始。動力は馬で、貨車と客車を引いた。ドイツ・コッペル社製蒸気機関車を2両購入。価格は1両当たり4680円（現在の約2千万円）。この年の乗客数は9850人
- 3年（1914年） 動力を馬車から蒸気機関車に変更したことで、乗客数は1万7958人と倍増
- 6年（1917年） ドイツ・コッペル社製蒸気機関車をもう1両追加購入
- 12年（1923年） 下館駅を会津下館駅に、樋ノ口駅を会津樋ノ口駅に、大原駅を沼尻駅に、それぞれ改名
- 15年（1926年） 開業から20年余りで、鉱山の年間硫黄生産高は6665トンまで増加。軽便の乗客数は、開通時の約7倍の6万5500人になった

- 1 酸川野の森の中を軽快に走り抜けるディーゼルカー「キハ2401」
- 2 猪高生の乗降駅だった会津下館駅。当時のトイレが下館地区に残っている
- 3 白木城駅での風景。当時、駅にホームは無かった。地面に降りて車掌が「切符を拝見します」
- 4 廃止直後の川桁駅。業者が、車両などを解体する姿に、関係者の胸が痛む
- 5 行商のおばさんたちが車内で情報交換。「今日は売れただがよ?」「うん、まあまあだ」



Interview
沼尻鉄道の元職員
半澤武男さん
Hanzawa Takeo
下館

うれしくもさみしい最期

沼尻鉄道に、初めは軽便の修理・営繕係として、廃線前の9年間は運転手として勤務しました。軽便は車両の連結部分の遊びが大きいので、発車、停車やブレーキ操作には常に気を遣いました。いろいろな部署の同僚8人でラッセル車を手づくりしたことが忘れられません。自作のラッセル車が、まるでイルカのジャンプのように雪を左右に飛ばした時は感動しました。経費削減にもなったとみんなで喜びました。廃線の日、最終列車を運転、無事沼尻駅に到着すると、近所の人や旅館の番頭さんなどが出迎えてくれました。「おつかれさま」と声を掛けられました。うれしいようなさみしいような、複雑な気持ちだったことを覚えています。

い出として多くの人々の心に焼き付いている。

時の流れに逆らえず

地域に密着し、住民の暮らしと共にあった軽便鉄道だが、鉱山の閉山と運命を共にすることになる。高度経済成長の波は、プラスにばかり働いたわけではない。国内の硫黄鉱山は、すべて閉山に追い込まれていった。急激に進んだ車社会によって、鉄道もバスやトラックなどの自動車貨物に活躍の場を奪われた。沼尻軽便鉄道は、磐梯急行電鉄株式会社との倒産に伴い、昭和44年3月27日、全線廃止となり、多くの人に惜しまれながら57年の歴史に幕を下ろした。



入線以降、廃線まで主力機として活躍したDC122

- 44年(1969年) 全線廃止
- 43年(1968年) 磐梯急行電鉄株式会社が倒産。それに伴い全面運休
- 42年(1967年) 社名を磐梯急行電鉄株式会社に変更
- 39年(1964年) 社名を株式会社日本硫黄観光鉄道に変更
- 28年(1953年) 福島市の協三工業株式会社製ディーゼル機関車を2両導入。乗客数は年間34万5千人。ピークを迎える
- 27年(1952年) 初の女性車掌誕生
- 19年(1944年) 社名を沼尻鉄道に変更。合わせて運輸事業を目的とする軌道から公衆用に敷設する地方

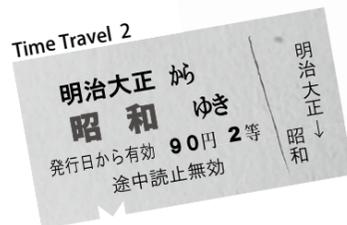


心の豊かさがあふれる当時の車内。「あんただづ、どこまで行くの?」

硫黄から観光中心へ

「黄色いダイヤ」と呼ばれ、鉱工業の中心だった硫黄だが、30年代に入ると状況は一変する。資源の枯渇に加え、石油の脱硫装置から硫黄を生産することができるようになったのだ。石油需要の高まりに伴って、新しい手法による硫黄の生産が急増。一方、海外では、画期的な硫黄採掘技術によって大規模な硫黄鉱山開発が進んだ。国産天然硫黄の価格は急落、次第に採算がとれなくなっていく。硫黄輸送に鉄道収入の多くを依存していた沼尻鉄道の経営状況は悪化。生き残りをかけた経営改善策として、観光旅客輸送の拡大に乗り出すことになった。当時は高度経済成長に伴う右肩上がりの時代。沼尻、中ノ沢

の両温泉への湯治客はもとより、沼尻スキー場の利用客など、乗客は年々増加した。スキー客でにぎわう冬期間は連日、臨時列車が増発される混雑ぶりだった。軽便鉄道は、地域住民の生活にも大きな影響を与えた。行商のおばさんが乗り込み、沿線の村々を回って季節のものを売り歩いた。冬の線路の除雪は、沿線住民の貴重な現金収入になった。鉱山の社員の子どもには無料定期券が配られるなど、通勤通学の足としても利用され、地域の教育にも貢献した。「大原から沼尻への坂道を登れなくて、乗客が降りて車両を押ししたこともある」「ちよつとくらい遅れても、声をかけると止まって待ってくれた」など、心温まる数々のエピソードは、古き良き時代の思いを伝える。



硫黄産業が下火になると、軽便鉄道は観光旅客輸送に活路を見出した。「マッチ箱」の愛称で親しまれ、湯治客、スキー客や地域に暮らす人々など、多くの人の足となり活躍した。

消えた「マッチ箱」

沼尻軽便鉄道の略年表



乗客から「マッチ箱」の愛称で親しまれたガソリンカー「ガソ101」

- 昭和5年(1930年) ガソリンカー「ガソ101」が導入される
- 12年(1937年) 年間乗客数が10万6075人と初めて大台に乗る



車内もホームも満員。軽便には、いつも笑顔と活気があふれていた



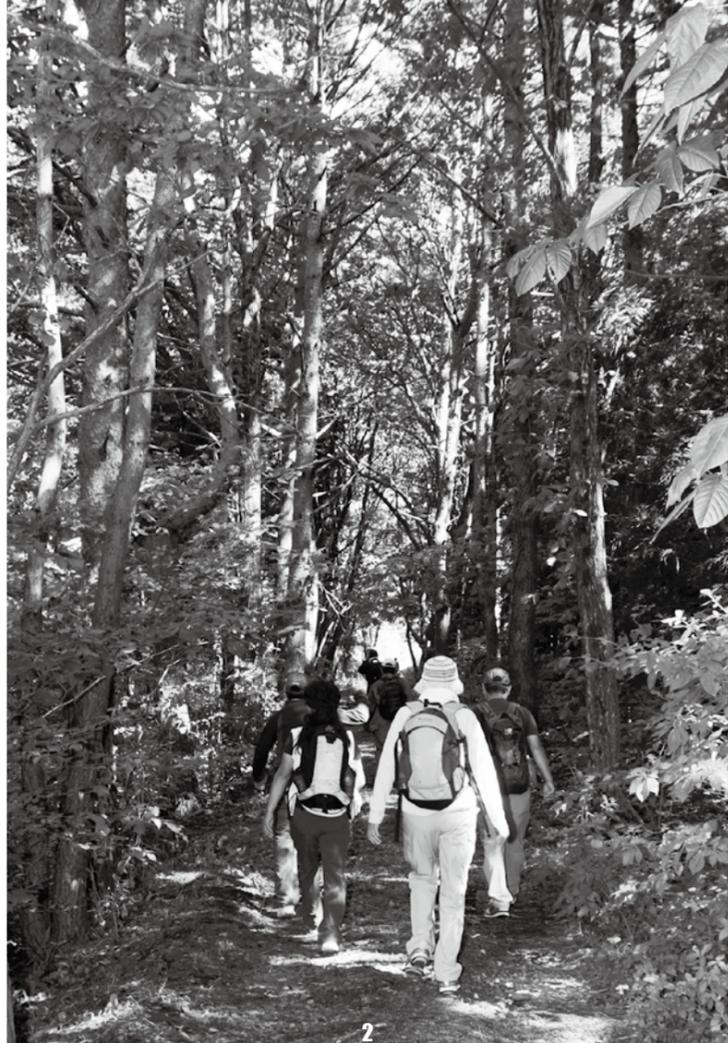
Interview

懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて実行委員長
赤埴征利さん

Akahani Masatoshi
新町

軽便は進行形の観光資源

町商工会青年部員は、実行委員としてイベントを運営しています。軽便鉄道の歴史を継承する一方で、軽便を重要な観光資源ととらえた取り組みを展開しています。今年は、中ノ沢温泉への宿泊パック利用者に限定した2日目のウォーキングイベントを企画。地域の魅力に触れてもらう機会を増やしたところ、大変好評でした。参加した皆さん一人一人に喜んでもらうことはもちろん、口コミで中ノ沢温泉や猪苗代町を訪れる人が増えれば、もっとうれしいですね。今後は、川桁地区や沿線の地区にもぎわいをつくるなど、まちおこしの手助けができるイベントになるよう、内容を充実させていこうと考えています。



2

ちが継承者となって実行委員会を組織し、イベントの継続を決めたのだ。

「軽便と共に生きた時代を忘れないでほしい」

「軽便の歴史を学んでほしい」

誰もが夢を持ち、希望を抱いて生きていた古き良き時代の蘇生への思いは、軌道跡を歩く参加者にも確かに伝わった。

各駅跡で切符を切ってもらった時には、参加者とスタッフとが互いに声を掛けあった。給水ポイントでは昔話に花を咲かせた車から応援してくれる人には笑顔で手を振り返した。

「汽車の窓からハンケチ振れば牧場の乙女が花束投げるーあのフレーズが聞こえてきそうなりとりがそこにはあった。軽便は走るコミュニティーだった。車内で交わすコミュニケーション、互いを気遣う思いやりなど、そこには平成を生きてきたわたしが忘れかけている一番大切な人と人のつながりがあった。

中ノ沢・沼尻温泉車一口湧出量日本一記念と銘打ち、9月26日に開かれた「第12回懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて」ウォーキングイベント。限定200人のお客さんを出迎えるスタッフの姿に、花束を投げる乙女が重なって見えた。

Voice 「懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて」に参加して



伊藤好広さん・優子さん
翼さん・未咲さん
(沼ノ倉)

新聞の折り込みチラシを見てイベントを知り、参加しました。登り坂の多いコースで疲れました。下館の展示場には初めて入りました。軽便鉄道が通っていた道の多くは、猪苗代町に住んでいても、まず通りません。普段見られない風景を見ることができたこともよかったです。

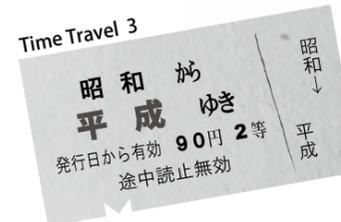


渡部実さん・弘子さん
(会津若松市)

今回初めて参加しました。各駅の跡で切符にはさみを入れる改札のアイデアが面白いと思います。会津下館駅にある停車場で見た展示物の内容も懐かしくて良かったです。コースは、最後の登り坂がきつかったですね。スケジュールが合えば来年もぜひ参加したいです。



- 1 9月に開かれた「懐かしの軽便鉄道を訪ねて2 DAY ウォーキング」。川桁駅前から終点を目指す
- 2 大原から沼尻駅前までは、森林浴をしながら森のトンネルを歩く



夢と共に復活への汽笛

惜しまれながら廃線となった軽便鉄道。それから32年後、一つのイベントが始まった。軽便鉄道を忘れない、軽便鉄道にはまだできることがある、そんな思いと共に、夢は走り出した。

高原列車どこまでも

第二次大戦の敗戦からバブル経済まで一気に駆け上がった昭和は、日本史上、最もエネルギーで、騒々しく、重々しい時代だった。

そんな激動の波にのまれ、みんなに愛された軽便鉄道は姿を消した。廃線時にピークだった軽便鉄道への思いや記憶は時間と共に薄れていった。

それから32年後「軽便の記憶を風化させてはならない」と立ち上がった猪苗代観光協会。平

成11年、鉄道軌道跡を歩くイベント「懐かしの軽便鉄道を訪ねて20,000歩」はこうして開かれた。

「軽便鉄道の歴史と当時の暮らしを後世に伝えたい」。安部なかせさん、酸川野中ノ沢地区周辺の商工会青年部員らは、中ノ沢地区のゴール地点で「高原列車の終着駅にようこそ」というおもてなしの展示を開いた。参加者の中には、元山や製錬所で暮らしていた人、沼尻鉄道に勤めていた人、軽便で通学した人など懐かしい顔ぶれも。歴

史を伝える展示物の数々に歓声を上げたり、軽便鉄道の写真に涙を流したり、会場は最盛期の「昭和色」に染まった。そう、人々の心の中には、今なお軽便が走り続けていたのだ。

「歴史の継承だけではなく、これを観光資源にできないものか」。商工会青年部のメンバーの多くがそう思った。翌12年、中ノ沢地区と川桁地区の青年部員らが中心となって「第2回懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて」を開いた。軽便鉄道の歴史を後世へ伝えていくために、自分た

沼尻軽便鉄道の略年表

- 平成11年(1999年) 中ノ沢温泉観光案内所で「沼尻軽便鉄道写真展」を開催。ウォーキングイベント「懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて20,000歩」を開催。以後、毎年開催
- 平成12年(2000年) 写真集「写真でつづる 懐かしの沼尻軽便鉄道」が発刊
- 平成13年(2001年) 写真集「続 懐かしの沼尻軽便鉄道」が発刊
- 平成14年(2002年) 中ノ沢温泉入口に「高原列車は行く」の歌碑建立
- 平成16年(2004年) 川桁駅前に「沼尻軽便鉄道記念碑」建立
- 平成19年(2007年) 「沼尻鉱山と軽便鉄道を語り継ぐ会」発足
- 平成20年(2008年) 川桁ふれあいセンターで「沼尻軽便鉄道ミュージアム展」を開催

よみがえれ、昭和力

沼尻鉱山と軽便鉄道を語り継ぐ会の悲願だった常設展示場が、「村の停車場」2階にオープンした。今こそがターニングポイントだ。停車場に行つて、大切なものを思い出そう。これからの時代を生き抜くため、昭和力を蘇生させよう。



念願の常設展示場

昭和43年に閉鎖された沼尻鉱山と、それに伴い廃線となった沼尻軽便鉄道の歴史を後世に伝えようと活動する「沼尻鉱山と軽便鉄道を語り継ぐ会」（出口陽子会長）。同会は6月27日、旧会津下館駅前交流施設「村の停車場」2階に、鉱山や軽便鉄道に関する資料を集めた常設展示場をオープンさせた。

出口会長は「発足当時から、いつかは常設展示場をと思っていた。願いが実現してうれしい」とあいさつ。津金要雄町長、軽便鉄道最後の運転手半澤武男さんと共にテープカットに臨んだ。元車掌の小檜山一夫さんは記念切符を改札した。出席者は、懐かしむように展示物を眺め、往時に思いをはせた。



オープン当日、多くの人々が訪れた展示場。写真資料のほか、沼尻鉱山や軽便鉄道に関する年表、時刻表や車掌の制服など約300点が所狭しと並べられている。中央には、軽便モジュール倶楽部（畑中博会長）の会員が製作した巨大な鉄道模型が展示されている。模型は「川桁～沼尻間」全線の風景を精密に再現している

- 1 展示場のオープンを記念してテープカット（左から）半澤さん、出口会長、津金町長
- 2 展示場の壁一面に所狭しと並ぶ写真
- 3 村の停車場の外観。建物は旧長瀬農協。向かい側には当時のトイレが残る
- 4 軽便モジュール倶楽部の会員が製作した鉄道模型
- 5 緑の村に展示されているディーゼル機関車と客車（DC121とボサハ12 2両）今にも動き出しそうなほどよく手入れされている
- 6 沼尻駅前にも残る駅舎。当時は90度横を向いていたという

駅から見える現代

駅は現代社会を映す鏡である。昭和の時代は、窓口で切符を買い、改札で駅員に切符を切られ、下車駅の改札で駅員に切符を回収された。平成の今は、自動券売機で切符を買い、自動改札をくぐり、自動改札から表に出ていく。

つまり、人を介さずに乗り降りができるのだ。ホームで世間話をする姿は見掛けなくなった。列車を降りた人は、われ先にとエスカレーターに向かって走り出す。昭和の時代、映画や小説の舞台になった、ロマンあふれる情景は、どこにもない。

効率性や速さを求め続けたわたしたちは、物質的な豊かさや便利さは手に入れたが、一方で、車窓から見える景色に感動することも、車内での小さな出会いに感謝することも少なくなってしまう。

デジタル時代、パソコンやケータイがあれば、部屋にいなから世界中の物を手に入れられる。クレジットカードがあれば、お金を払うに行くことすらない。外に出なくても生活できる社会になってしまったのだ。

では、人はコミュニケーションを求めているのだろうか。そうではない。むしろ求めている。

よみがえれ昭和力

る。ケータイ片手に、頻繁にメールチェックする若い世代がその象徴。現代人もまた、人とのつながりを求めている。

昭和が夢とロマンにあふれた古き良き時代なら、平成はどうだろう。技術革新により、さらに進化・高度化したとは言え、何となく先行き不透明で不安な時代と言えるのではないか。

平成にあつて昭和にないものはたくさんある。昭和にあつて平成にないものはない。だが、わたしたちは大切なものを忘れてかけてはいないだろうか。見失いかけてはいないだろうか。人とふれあい、かわりながら暮らしていた時代を。

村の停車場という駅ができた今こそ、ターニングポイントだ。夢とロマンにあふれ、エネルギーに生きたあのころを取り戻せるような気がする。さあ、眠っている地域のチカラを、埋もれている地域のチカラを、猪苗代の潜在能力を呼び覚ませよう。大切なものは意外にも身近なところにある。

村の停車場は、大切なことに気付く場所、昭和力を蘇生する場所。そう、わたしたちの心の停車場だ。

Interview

軽便モジュール倶楽部

畑中 博さん

Hatanaka Hiroshi
東京都



産業遺産として保存してほしい

軽便モジュール倶楽部の会員は約20人。ネットで結ばれた会員が全国にいます。沼尻鉄道の模型を作ろうという話になって、現地調査に行った際、安部なかさんと知り合いました。その縁で展示をしています。平成19年には川桁ふれあいセンターで運転会を開きました。地元の年配者の皆さんからいろいろな話を聞いたのが楽しかったですね。全国的にも有名な沼尻軽便。展示場に足を運ぶだけの価値があれば、立派な観光資源になります。模型が一助になればうれしいです。今は装置が複雑で一般の人が走らせることはできませんが、将来的には誰でも動かせるような簡単な仕組みにしたいと考えています。沼尻軽便が、産業遺産として大切に保存されることを願います。



沼尻鉱山と軽便鉄道を語り継ぐ会事務局

安部なかさん

Profile 1951年猪苗代町生まれ。町ふるさと歴史館勤務。沼尻鉱山と軽便鉄道を語り継ぐ会の中心メンバーとして活動している。好きなスポーツは剣道。酸川野在住、59歳



軽便は猪苗代の財産 保存だけではもったいない もう一度走らせたい

若い世代に伝えていこうと思っています。実務面では、データ整理ですね」と笑う。さらに、「もう一度、軽便のエンジン音を聞きたい。レールの上を走らせたい。それが夢」とも。さまざまな分野で活躍してきた軽便。多くの人から愛され、役に立ってきた軽便。「今も、これからも。きっと（軽便に）できることがあるんじゃないかって思うんです。軽便は、町にある文化遺産や歴史遺産とも肩を並べる財産だと思います。車両や駅舎が残っているんだから、保存だけではもったいない。なんとか活用する方法を考えていきたいですね」子どものように瞳を輝かせた。

自費出版から3カ月。写真集は完売、増刷することになった。「軽便はこんなに多くの人の心の中に生きていたのか」と思うと、うれしくなった。同時に、写真や情報の提供者、地域の人々、印刷会社など多くの人との出会いと協力があって出版できたことに、心から感謝した。「懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて」には、毎年スタッフとして参加している。町内の有志と共に立ち上げた「沼尻鉱山と軽便鉄道を語り継ぐ会」では事務局を務める安部さんに今後の取り組みと夢を尋ねた。「『高原列車は行く』という名曲と軽便鉄道を守る灯を絶やさぬよう、

「子どものころ、わたしにとって軽便は目覚まし時計がわり。家のすぐ裏を走る始発の音で目を覚ましていました。軽便を利用するいろいろな乗客を見るのが好きでした」

軽便好きの安部なかさんが、時を経て、動き出したのは平成7年。父親との昔話がきっかけだった。「もっと軽便を知りたい」と元運転手の渡部力さんを訪ねた。渡部さんの話は楽しかった。ますます興味がわいてきた。

数年後、中ノ沢の旅館組合に勤務していた安部さんは、軽便鉄道の写真展を企画した。「地元の人にもっと軽便を知ってほしい」。渡部さんや近所の人から、たくさんの写真や資料が集まった。写真展は好評を得た。

「地元の人だけでなく、お客さんにも喜ばれたんです。お客さんと話した軽便の思い出話を、全部とおきたいと思ったくらい」と言葉を弾ませる。

仕事で沼尻温泉の源泉まで登った。「あそこが採掘場、あそこは元山の学校」と説明された。採掘場跡の残がいや元山小中学校から、たくさんの人の思いや子どもたちの声が聞こえるような気がした。

「ものすごい衝撃を受けました。ここに暮らした人々の大事な歴史をみんなに伝えなければと思いました」

関係する文献を読みあさり、沼尻鉱山や軽便鉄道のことを調べた。そしてあることに気付いた。軽便がなくなると、さようならも、ありがとうも言っていなかったことに。

「何かを通して、軽便への感謝の気持ちを伝えたいと思いました」。そんな矢先、知人から野矢俊文さんと小松山六郎さんを紹介された。

3人で写真集を作ろうと話し合った。売れなければ「買い取り」を条件に、なんとか出版にこぎつけた。覚悟の

取材を終えて

今なお多くの人を魅了してやまない軽便鉄道。

わたしたちは、貧しくても笑顔にあふれていた、苦しいけれど幸せだった昭和の時代を、軽便鉄道に感じているのではないだろうか。

全力で駆け抜けてきたからこそ、気付かなかったことがある。見落としてしまったことがある。見落として立ち止まり、肩の力を抜きながら、あのころを思い出してみよう。もう一度、価値観をリセットしてみよう。

鉄道には上りと下りがある。レールが続いている限り、行ったり来たりを繰り返すことができる。わたしたちが戻った過去という終着駅は、向きを変えれば未来への始発駅になる。

さあ、忘れものを探しに行こう。大事なものを取りに行こう。あなたが見ているレールの先には、あなたが願う夢や希望がきつとあるはずだ。軽便は「昭和の遺物」ではなく、あのころに戻る「タイムマシン」。限らない夢を乗せ、今、ゆつくりと走り出す。

大正発未来行きの時間旅行の中で、
あなたの大切なものは見つかりましたか？
さあ、ここから一緒に未来へ。
マッチ箱に乗って

NUMAJIRI KEIBEN

【資料提供】沼尻鉱山と軽便鉄道を語り継ぐ会、田中新一氏
【写真提供】新井清彦氏、園田正雄氏、青木栄一氏

特集 マッチ箱に乗って完